

## ピラの内容(概訳)

人々へ

六年間の闘いによって、プレバ・ポプラル(高校)は学問的な方面と同時に政治的な面で毎年前進してきた。経済的・道徳的な基盤故に、大衆はわれわれのプレバをその建設当初から支持してきた。プレバは第一、二、そして第三の階層が大学へ入る道である。

ほとんどの高校では、中学を卒業した拒絶者からなる新しい階層がその生徒数を増やしている。その結果として人民学校の建設の必要が出てきている。

このような理由によって、また地域社会における異なったグループの行っている社会奉仕の異なった形態として、本、着物、薬品類の供与をお願いする。

無料教育のために。

高校自治会

この学校を含めて、メキシコ・シティでは三校が国

さて皆さんお元気ですか。日本は今頃じめじめした天気でしょうか。こちらは着いた日から二、三日は晴れていました。手紙を書いている今日(二二日)は曇って雨がバラついてます。今、市内で下宿を借りて住んでいます。ですが飯つきで一萬七千五百円。少しいへんですが地理的に便利なのでここにしばらくいます。

メキシコ・シティでの新左翼学生運動については、まだ多くの材料がそろっていません。また尾関氏に紹介されたO・N・T・の事務所(Centro Republicano Espanola de O.N.T.)に行きました。ドミンゴ氏(尾関弘著『現代のアナキズム運動』三一新書に登場)には会えず、水曜日(二〇日)に来ること、又行くことにした。先日、大学の前段階にあたる予備校(日本での高校にあたる)にメキシコの友人と訪れ、学生運動の指導者(director)に会いましたが、若いのにそつけない態度で俺を扱い、まったく頭に来ました。同封のものはそこで手に入れた prepa

(高校)のものです。

の援助を受けずに運営されている。そのため、多くの人からお金をもらったり、物品をもらったりしている。メキシコでは、大学に行くものはごく少数の余裕のある子弟に限られている。ほとんど就職のチャンスの少ないこの社会にあって、はじき出された者は、大学にも行けずに高校に居坐っているのだ。これがメキシコでの六八年闘争の発火点になったのだと思った。

高校の設備は私の田舎の中学のそれよりきたなく貧弱で、これは国立大学でも同じようだ。たいては衛生的でないこの社会の一つの特徴なのだ。

今は静かなこの校内も、六八年当時は、活動家たちがそろって街頭に出ていった。そして各教室には、六八年一〇月二日の虐殺時に殺された学友の壁画が、サバタ、ケバラ、バスクス(七二年グアダルラで暗殺される)らと共に飾られているのを見て、当時を偲ぶばかりである。(六月一八日発)

約束の日、七時にO・N・T・の事務所に行くと、一〇数人(ほとんどがおじいちゃんばかりで、若いのは明日別の場所で会えることになった)の人が集っており、

簡単にみんなに紹介された。会合はまず外国からの書簡の紹介に始まり、発言はほとんど全員が行っていたようだ。マルコス(議長)は、少々神経質な男で、意見のくい違いや、人間的なこじれもあったようだが、討論の最中に手にした紙を思い切り引き裂いたりしてびっくりした。とくに金の問題、ヨーロッパとの関係が強い南米にあっては往復する手紙・雑誌類が貴重で、重要なのだがその資金ぐりでごたついていたようだ。

運動全体についてはまだ十分に判らないが、ある人はきわめて低調だと言っていた。それは明日の若いアナキストの連中との話し合いや、国立大学生の間で予定されているというアナキストに関する連続講演会に出席すれば徐々に判ってくるものと思う。

講演会のピラの内容(概略)

O N T

メキシコ・スペイン労働総同盟

A I T

同志へ

国立大学生の間で組織されたサークル評議会をアナキズムの周にはりめぐそうとしているのを報告する。

六月一七日(日)一二時に第一回を、そして毎日日曜

日同時刻に行り。必ず出席するように。ここにその予定を記入しておく。

- ① 六月一七日マルガリータ・カルポによる「アナキズムの爪跡」ヨーロッパにおけるアナキズム運動
- ② 六月二四日ブルードン・カルポによる「スペインのアナキズム運動」
- ③ 七月一日ジャン・タル・ジョイドによる「メキシコにおけるアナキズム運動」
- ④ 七月八日アルゼンチン共和国文化使節員による「アルゼンチンにおけるアナキズム運動」
- ⑤ 七月一五日ゴンザレス・ロホによる「アナキズムの現在の意義」

この日程は、「チャプルチベックの湖の家」でその日決った時間に行われる。

CNTメキシコ委員会

## ゲラン著「神もなく主人もなく」上巻

三 浦 精 一

長谷川進君の訳で、このアンソロジイが出た。上巻はマックス・スチルナー、P・J・ブルードン、ミハイル・

バクーニン、直接行動と絶対自由主義的建設への予想に

第二信はこれくらいにします。

日本からの運動全体を示すような書簡なり、今の情況を知らせて下さい。待っています。

金がすべてのこの社会のなかにあって安くあげるにはどうするかを考えていますが、こればかり考えていては何もできそうにありません。市外に出るのはしばらく後にします。(六月二〇日発)

山本アントン君への連絡は島根県那賀郡弥栄村三里弥栄之郷共同体尾関を経由して可能です。異国の同志に便りと差し入れを

ついて、ジャム・ギョーム、ピョートル・クロボトキンが納められている。とりあえず、強くひかれていたスチルナーを読んだ

けだから、書評として書く気はない。少しばかりスチルナーを中心に書いて紹介に代えさせていた。

ゲランがどのようにスチルナーを扱っているか。これはこの本全体を通じてのゲランの視点でもあるだろう。

ゲランは、社会本位的(ソシエテール)な態度に反対して「唯一の(ユニク)」、すなわち他に類のない、自然がただ一つの型に打出した個人の、個有の価値を宣揚するスチルナーは孤独な叛逆者であり、孤児であるという。このことは一般にスチルナーについて言われて来たことだが、ゲランはこの叛逆者、この孤児の中に、個人を打ち砕くいっさいの疎外、産業奴隷制ならびに全体主義的順応主義の疎外から個人を救出しようとする現代世界の主たる関心への照応を見るばかりでなく「彼のペンを走らせた情熱は、時おり彼を逆説に迷いこませる。そのため彼はふと非社会的な警句を口にする。社会生活の不可能なことを結論さえる。しかし折りおりのこうした気紛れは彼の思想の根本を表わすものではない。シュティルナーはその遁世的な態度にもかかわらず共同体生活(コミュニティール)を熱望しているのである。孤立した人々、幽閉された人々、内面的な人々の多くと同様に彼は共同体生活に郷愁を抱いている。彼の排他主義がどうして彼に社会に生活するのを可能にするかを訊ねる人

に、彼はただ自分の唯一性を理解した者だけが自分のような人間と関係が結ぶことができるのだと答えている」こうしたシュティルナーへの理解は、さらに「個人と社会とのシュルナー的綜合は不安定なままである。この叛逆者の思想のうちでは、非社会的なものとの社会的なものとのとけ合うことなくつねに対立している・・・」とシュティルナー自身が表わす矛盾と、一般からの誤解との根源をもとめて、ここにブルードンたちフランスの思想家たちと共通の基盤をもつものであることを説こうとしている。

このアンソロジイの中にはゴッドウィンを入れていないのは残念だが、ゲランがスチルナーの人間の中に迫って行ってアナリズムの基盤となるものを人間そのものにもとめ、そこからこのアンソロジイを書いていると考えて良いと思われる。だからブルードンの中に、どのように個を捕えるか、期待しながら読み続けたい。

スチルナーの小伝はアルマンによっているが、アルマンは、マッケーに拠っている。マッケーほどスチルナー研究に打ち込んだ者はなく、スチルナー研究には必ずマッケーを通過せざるを得ない。ウッドコックもマッケーによって書いているのだが、ヒッペルの酒場にトグロをまいた自由人の中にマルクスやエンゲルスがいたこと

外に、皆がヘーゲルの権威主義的哲学をはじめとしてフ  
ォイエルバッハ、ブルードン、マルクスなども批判の対  
象となったことを書いてある。このグループの中で、ス  
チルナーことヨハン・カスパー・シュミットはあまり目  
立たない、孤立的な存在だったようである。しかし、彼  
は直接ヘーゲルの講座にもつらなつたこともあり、また  
マルクスの「ライン新聞」に「教育論」を発表している  
ことから見て、目立たなくても注目された存在だったの  
であろう。このグループに來た一女性マリア・デーハ  
ルトと結婚した様子をウッドコックは書いてあるが、そ  
の結婚生活は幸福ではなく、分れて五十年後にマッケー  
に語ったデーハルトの言葉は「あのように教養があり  
教育も受けた人が、私のような憐れな女を利用し、信頼  
を裏切つてその財産を勝手に処分することができたこと  
を考えると、血がにえくりかえる」というのだった。  
世俗的な女がカスパー・シュミットによつて世俗的に満  
たされずに破局にいたり、最後まで「私の財産を使つて  
しまった」というのでは、世に容れられない思想を持ち  
続け、それを売物にする營業的社交的才能を持たずに生  
活と戦かわねばならないスチルナーこそ被害者だろう。  
窮迫して獄に入れられたり、債鬼をさけてかくれ住んで  
書いたり翻訳したりして淋しく死んで行つたスチルナー

の不朽の著作は結婚当時に世に出した「唯一者とその所  
有」だった。ウッドコックも言うように、彼の唯一者は  
後にニーチェの超人として実つたのだ。  
このように僕が、ゲランのアンソロジーの中の一編に  
燃えるような気持でとりついているのは、若い日に大杉  
の「生の闘争」の中でとり上げられた、スチルナーの教  
育論に感動したからだ。そのときは感動というよりも、  
単に心ひかれたという程度だったはずだが、それが今の  
年令にいたるまで、他のものは忘れても、こればかりは  
忘れられないものとして残っている。他のもつと強く感動  
したものをすら忘れるのにだ。  
大杉はスチルナーの唯一者について「僕はこの議論に  
は、ずいぶん多くの誤謬のあることを認める。けれども  
・・・ヘーゲル派の左党から出たあらゆる著書の中で、  
一八四八年前のプロシヤ国家に対する、その窒息さすよ  
うな強圧的規律に対する、これほどの猛烈な反抗は見出  
され得ない。そしてまた当時の自由主義の徒が、力によ  
つて権利を獲得することを知らない臆病をこれほどまで  
に痛烈に罵つたものは、その後とてもあまり多く見出さ  
れない」という。そして「現代のわが日本の社会に、力  
の宗教を説いたこのスチルナーやまたかのニーチェなど  
の剛強な個人主義的哲学が、さらに幾度か繰返して説か

るべき要あることを思う」と結んでいる。

大杉の言うスチルナーの多くの誤りというのは、ゲラ  
ンが「折りおりのこりした気紛れ」で「彼の思想の根本  
を表わすものではない」と言う通りだろう。そしてその  
教育論は大杉が「ヘーゲル派哲学の支配から、少しも抜  
け切らずにいることを、まず認めなければならぬ。すな  
わち彼はいまだ、ヘーゲルの言う意味の霊と自主的意志  
との間に、超ゆべからざる深淵のあることに気がつか  
なかつた。彼のこの教育論のあいまいな個所は、すべて  
みなこの欠点から來ると言つてもいい」と批判したもの  
だが、この教育論が当時の日本の教育の欠陥そのものを示  
すものであり、「そして僕等自身もまた、常に自ら、か  
く形成された僕等の不甲斐なさを、この卑劣を、悔恨し  
ふんまんしている。僕等の受けた知育や徳育は、要する  
に僕等をして、主人のために役立つべき聡明な、温順な  
そして強健な小動物としてしまつたのだ。僕等は僕等の  
弟妹や子女を本当の人間に教育すると同時に、僕等自ら  
もまた、僕等の教育をしなをさなければならぬ。本当に  
自由な人間とならなければならぬ。本当にみんなが自由  
な人間となり得るように、僕等の周囲を改造しなければ  
ならぬ」と結んでいる。

大杉によるこの教育論の摘要は、大杉自身がこれによ

つて深く自らを探つたものとして、大杉自身の訴えであ  
ると言える。ゲランがその摘録の冒頭に「現代の教育革  
命に先んずるものであろう」と書いていることによつて  
も、この教育論は今なを新しい生命を持つものである。

ゲランの摘録は「教育の究極目標は、もはや知識では  
あり得ず、この知識から生れる意志にある。要するに人  
格としての人間もしくは自由な人間を創出することを目  
指すことにある」。しかるに学校教育は自由意志を抑  
圧して時代に順応する俗物、善良な市民をつくる。こう  
したことに對して、どこで反抗し、「教えこまれた人間  
のかわりに創造する人間をどこで形成するか」「教育の  
貧困の大部分は知識が意志、自主的活動力、純粹の實踐  
に仕上げられないことに由來する」「だが教育はすべて  
人格教育となるべきである・・・いいかえれば教えこま  
なくてはならないのは知識ではない。それは見事に開花  
せしめるべき人格である」「まっとうな人間は権威者で  
あることを必要としない」「權威に助けを求めるとは、  
まったく弱いからに外ならない」「新しい原理は意志の  
原理であり、知識の意志への変容の原理である。そのこ  
とから出發すると、もはや八学校と生活との合致は不  
用であり、学校が生活となり、外部におけると同じくそ  
の中で人格の自主的發見を義務とすることに」結論

として「知識は、意志として復活するために死し、自由な人格のごとく、日々に自己を再生しなければならぬ」と要約することができる。

ゲランはこのようにスチルナーの教育論を表現しようとしたのだが、大杉はゲラン以外にスチルナーから汲み取るうとした。スチルナーが書いてあるのかどうかは引用として書かれていないから分らないが、少くとも大杉がスチルナーの教育論について読みながら考えたことに違いないだろう。「現実主義はいっさいの抽象を嫌って抽象が生命や自由の仇敵であるかのごとく信ずる。けれども生命や自由は、かえって、この抽象の中にあるのだ。いっさいの物質を滅却して、それを精神化する抽象こそ本当の解放者なのだ。自由人とは、いっさいの現実を超越して、あらゆる知識を自我の統一の中に帰せしめたものを言うのだ」と言っている。そして「本当の自由とは自由人にとっては、その自由を表現することである。そして本当の科学とは新しい生命を与える、自由そのものである」と言う。ベルグソンを読んだ大杉には、初期スチルナーのヘーゲル臭が気になったに相違ないが、大杉の書いたものの随所に、スチルナーが顔を出していることは事実である。

唯一者とその所有からゲランは「国家と呼ばれるもの」

君主であるときも絶対の自由を享受することはできないと言っている。(それなのにリベルテールを絶対自由主義と訳するのはなぜだろう)。自由を制限するものであっても結社せずには居られない人間こそスチルナーの前提でなければならぬ。そして結社は私自身の創造だと言う。しかし創造する私という個性には国家も社会も一指だに触れさせまいとする。

この結社と訳されたアソシアションはウッドコックはユニオンとしている。エゴイズムはユニークな個人のユニオンを否定するものではないが、それはどこまでも自発的なもので、オーガニゼイションなどはスチルナーの視野には入らないものである。「革命と叛乱とは同義語と考へてはならない。前者は国家または社会の条件または状態の転覆で、したがって政治的社会的行為である。後者は実は情況の変貌がその不可避の結末である。しかしそのことから初まるのではなく、人々が彼等自身で不満に思うことから初まる。それは武装蜂起ではなく、個人個人の立ち上りであり、それから発生する結果を考慮しない立上りである。」(英語からの訳でフランス語からの長谷川君のと少しちがっている)といった革命否定にも進む。そしてウッドコックはアルベール・カミュが革命を否定して叛乱を肯定したことを加えている。

「個人の自由と社会」「党派」「叛逆と革命」の四つを摘録してその全貌を表現しようとしている。

国家を否定しアソシアションを目標としている。アソシアションは日本語に訳しにくい言葉で、結社、組合、連合、協会、などいろいろに用いられている。アナルシストの団体にもフェデラシオンとともに、ほとんど同じ意味で使用されている。スチルナーはエゴイズトを国家に對立するものとし、エゴイズトの連合体としてアソシアションを考えたものと思われるので、ゲマインシャフトに近い概念と思われる。スチルナーのエゴイズトは長谷川君が個人主義者としているように、決して利己主義者の意味ではない。教育論の所でスチルナーが人格に重点を置いているように、人格的な愛や理解や同情を基礎として、連合する意志による結合体として考へねばならないのだろう。ゲマインシャフトの内部に、あるいはいくつかのゲマインシャフトを結合するものとしてのアソシアションの概念とは区別すべきであろう。アソシアションが社会に結晶するともはやアソシアションでは無くなると言っていることでも明白である。したがってそれは党派でもない。

自由に関しては結社(アソシアション)も国家と同様に、自由を制限するものとして、私は全ロシア人の専政

またウッドコックはほとんど同時代のゴッドウィン(一七五六一—一八三六)と対照させている。「その信念を不変の道徳法におき、人間の条件の改変する最善の手段として根本的に論じたゴッドウィンから、無道徳を個をとり上げ、個性的な自己主張の叛乱を求めたスチルナーまで、道は長距離に思われるかも知れない。しかし両方とも各人が自分に都合の良い範囲でだけ、他の個々のものと協力し、そのもとのままの状態をまもる、誇るべき社会に到達するのである」。

スチルナー、ゴッドウィン、ブルードン。ほとんど三人が時を同じくして現われた。日本でも少し前に安藤昌益が出ていた。皆それぞれに、独立に、人間の正義、人間の真実な在り方を追及した。こうした歴史的現象をとらえて時代精神と言う者もある。地震を追及する地質学者にとって地球が生物であるように、時代や変遷の中に生命や精神を見ようとするのだ。そしてその奥に神を見る者もある。

スチルナーがその非社会的な言動にもかかわらず、共同体を熱望したとするゲラン。ゴッドウィンと究極には同じものを目指しているとするウッドコック。物質を滅却して精神化し抽象する人間の中に生命や自由を見出す大杉。この三者から引用しながら書きなぐった僕は、ス

チルナーの唯一者をまだ読んでいない。僕としての考え方は、これを読んでからのことだ。だが前にも書いたように若い日に大杉を通じて知ったスチルナーについて、もっと知りたいと思っていたからだ。

X

これは蛇足だろうが、この本の題名となっている「神もなく主人もなく」について、少しばかり書いて見たい。この題名になっている言葉は、かつて信太君がその新聞の題名に採用したこともある。この本の序文の中にグランはその由来を書いている。一八八〇年にブランキが雑誌の題名に採用したのが始めのようである。クロボトキンもセバスタチャン・フォルムもこれを用い、アナルシストの標語のようになった。

僕がこの標語について言いたいと思うのは、この標語が生れたのはヨーロッパだということだ。誰だってそんなことは分っているじゃないかと言わなくてくれ。それはヨーロッパという歴史的世界を考えれば、本当の意味は分らないと思うからだ。ヨーロッパはキリスト教世界として、一神教の支配したところだ。子供のときからヨーロッパ人は神と言えば、ただ一人の神しか考えない習慣をたたくこまれている。だから無神論の対象になる神もこの一人の神である。「神もなく」というとき、こ

れはキリスト教の否定といった内容をもつのだ。

ところがアジアの中の日本、シナ、そしてインドではどうだ。日本には八百万（ヤオヨロズ）の神々がある。選挙に勝ちたいと願っている候補が鳥居の前を通りかかれば、思わず合掌して勝利を祈る。神体が何であるかなど考えはしない。シナでも道教の中にはあらゆる神々が雑居しており、インドでも同様だ。僕のように少年の日にキリスト教の神の前にひざまずいた者や、トルストイやドストエフスキーのものにあらわれる、一人の神の前に胸打つ人たちを知る者は、「神もなく」と言われるとこの意味はヨーロッパ人が反応するように理解できるかも知れない。しかし複数の神はそれ自体が単数の一神の否定ではないか。日本人の中には危機に際してこそ手を合せても、何でもないとときには別に信じているともいえないとも考えない者も多い。神もなくとわざわざ言わなくても、神なんか無いよと言える者も多いのだ。だが習慣は習慣で、お祭には参拝もする。仏教の場合も同様だ。禅宗などは無神論だと言われる。我れすなわち神、汝すなわち神と考える者もある。

こうした文化的な差、構造的な差を考えると、神もなく主人もなしという標語、こんな簡単なものにも東洋と西洋の差が考えられる。

日本の征服民族である大和朝廷の神話は一神的だ。侵入して国家をつくった砂漠の民族の宗教は多く一神教だった。名も無い神々と同居していた日本人の支配者は名前のある神として神棚を占居した。神々の世界にも征服被征服がある。それを民衆は八百万と無差別に呼ぶ。民衆の中に神が消えて行ったのだ。

## 野 火

尾関弘君から

同封したものの、メキシコに渡った友人からの報告です。リベルテールにのせて下さい。以後通信が到着しだい原稿にして送る予定です。・・・私の方は七月十日から二ヶ月のキャンプが始まり、また先月末から広島市で直販運動を始めており、この運動を通じて生産者（百姓）組合と消費者組合の組織化およびその連合体結成に向けての運動を始めています。なまの百姓となまの消費者を相手のしんどくて根気のいる毎日です。しばしばそのしんどさ、慣れない百姓仕事のしんどさに圧倒されそうになりながら、みんなとぼちぼちやっています。もしスペースと時期が間に合えば、リベルテールに同封のような夏のキャンプ要項をのせていただけませんか。（リベルテールの七月号はすでに印刷済、八月号は八月十五日発行

「神もなく主人もなく」といった標語は、われわれ日本人には縁遠い標語でしかないと思うのだ。万世一系という一神教的存在者はある。こうした主人も、かつて民衆が名前を持った神を、神々の中に消してしまったように、消してしまわねばならない。多神というのは一神の否定なのだ。

のため掲載中止、三浦)

尾関君のやっているような仕事はアナキストもサンジカリストも試みねばならない実際運動だ、資本主義機構を掘崩す運動の一つとして考えねばならない。資本主義も権力組織とともに、常識的に、観念的に深く、習慣にまで入り込んだ社会制度として存在しているのが実際なのだから、それを単なる暴力をもって崩すことができようか考えるのは幻想に過ぎない。人間にとって一つの生活習慣や悪癖を直すことは容易なことではないし、一つの小さな改良も大きな革命につながることは歴史の示す通りである。共同組合運動、共同体運動、サンジカリズム運動を肯定的に捕え直さなくてはアナルシズムに今後の発展はない。シンドイだろうが、アップアップしながらでも、資本主義経済の波浪の中で、何とかやれる

だけやって欲しい。革命の美名に酔うような虚栄をすてて、間違っても仕方がないのが人間なのだから、こうした試みによって、小さな一ミリの前進が、革命への一ミリの近接であると考えたいものだ。(三浦)

X  
前田幸良君から

私は七月十七日羽田発でフランスに向います。七月二〇―二一日シャトー・デュ・ロワール(ル・マンの近くで集会をします。それはアナキスト・インター運動をしようということです。仏・伊・英・亡命スペイン・ベルギー・オランダ・スイス・ドイツ、そしてハンガリーの各地から約三〇名の出席が確認されています。・・・アルフレッド・ボナンノというファブリとマラテスタを精力的に研究しているイタリアのアナキストが参加するとのことで、私は彼と会おうのを今から楽しみにしています。この後、イタリアのシシリ島のカタリーニョで集會も、ローマを起点に、アンコーナ、ピストイア、ジェノヴァその他のイタリア各地を回り、スイスのローザンヌのOIRA、ジュネーブのグループプレスト、ヴィシー、リヨン、ポルドー等ほとんど全土をまわり、その他ベルギー、オランダ、イギリスを回る予定です。スペインとドイツは行きませんが情報を手に入れたと思います。

彼地からまた連絡させていただきます。

X  
秋山清君著「反逆の信条」・北冬書房発行

一九六〇年以後、いろいろなものに発表したのを集めて約三百ページにまとめたものである。「アナキズムなどということについて何かを発言し、その立場から批判もしてはきたけれど、その間には自分自身もまた私が目ざす改革の相手、革命の目的だったのである」とあとがきに書いているように、秋山君も自分が歩いて来た道の一つ一つの指標として、これをまとめたのだろう。

X  
瓜生祐喜君から

お元気ですか。我々の運動の状況を知らせます。七月九日、同志新明氏と二人で黒旗「叛」をかかけてのピラマキ(清水君救援のため)。破り捨てる人は一人も見かけませんでした。一応成功です。この日は私のおばあさんの葬式で、胸をおさえて、久びさの街頭で、少し緊張ぎみ。でも清水君を思うとまだまだ解放感がありますから。七月十一日清水君より手紙が来ました。実刑五年とのこと。彼も大変ですね。(ピラ同封)

イオムの第2号に水島ひろ君が、喜多方のSさんのこととして新明君を訪問した様子を書いている。「ハッと

したのは、Sさん自身は全く飲まないビールを、ほくのためについでで飲んでいることではなく、それよりも八あなは、たった一人でピラを配ったことがありますかVと顔を直視しながら聞かれたためだった。それは長い年月にわたって、人口五万にはるかに及ばない会津の小都市で、アナキズムの火をともし続けてこられたSさんの口から出た言葉であるからこそ強く、積み上げられた時間の重さそのものとして、ほくに突きささっていた」と書いている。新明君は失対の労働で得たとほしい賃金の中から、ピラをつくってはまいている。瓜生君も上京した時、妻の典子さんと共にピラをつくってはまいていた。もし純正アナキズムというものがあるとしたら、ある日、ある時、これだと感じて、ただひとすじに全身全霊を打ちこんで、ジリジリと進むこの人たちに捧げねばならない。ヨーロッパでもアメリカでも、アナキズムも、アナルコ・サンジャリズムも、このような人たちの無私な、純な心によって、これによってこそ新しい未来、社会に踏みこむことのできるものとして受取られ、守り続けられて来たのだった。分化してしまつた末端的な分業の害を説いたクロボトキンの分業批判をそのまま受けとって分業全体がすべて悪いと思ひこむのも、こうした純な心の人たちである。こうしたことのためにアナ

キズムに血の臭いがついて、フォールはリベルテールという名でその臭いを追い払おうとしたのだが、日本ではリベルテールを絶対自由主義などと訳してしまつた。絶対と訳されている語には、ラールスによつても、独立の、主権をもつた、制限のない、完全な、などの意味があり、この地上に存在しない絶対自由主義などと訳すべきではないと思う。人間と迷蒙とはつきものだが、こうした迷蒙を見分けるためにこそ「学」の存在理由があるのだ。僕が純正無政府主義の語にこだわるのも、純とか純正を比較的な意味にとりたいからだし、純正や絶対が活字になると、それこそ絶対的などという感じの方が強まるからだ。

脱線してしまつたが、この人たちの純な心が、アナキズムを生き抜こうとするこのような「生の証(あかし)」なくして何のイズムだろうか。(三浦)

X  
スペイン

バルセロナの地下機関紙、ソリダリダード・オペラ(労働者連帯)は一九七三年四月十一日号の社説で一万部発行と伝えている。そして、あらためてソリダリダード・オペラは街頭に進出した。バルセロナ地方連合によって選出された革命的ジェネラルストライ紙の常任委員の一

人が、現在の闘争の継続中このソリタリタードの配布責任者になった。

カタロニアのONNT支部も「盗賊、殺人者の政府をたをせ、と宣言して、イベリア半島の全組合員にジュネラルストライキの共闘を呼びかけている。」

海老根茂君から

昨日ある本によって宮島資夫の墓を見て来ました。宮嶋資夫の墓と言っても宮嶋家の墓なのですが。多分皆様もう御存知の事かと思いますが、もしやまだ御存知ないのなら僕の家から近い所ですし、簡単な地図でも書いて送って差上げようと思えますが、いかがでしょうか。

原生 創刊号

名古屋から、このような雑誌が出るとは思ってもよらなかった。持論、名古屋にも運動があることは知っていたが、どちらかといえば、ノン・セクト的なセンスと勝手に思い込んでいたのだ。戦斗的シュティルネリアズムを宣言した彼らのこれからは、大いに期待したい。ただ、気になるのは、超国家主義者に対する過渡的感情移入だ。論理的には、彼らを適確に把握しているにもかかわらずその理論的対応を越えたところの感情移入があるように

こちらには感じられるのだ。それがどこから来るのか分からない(両者とも宗教性に依拠していることの共通性からか?)のだが、ただ、磯部浅一や野中四郎、安藤輝三に通じるのは、ネチャーエフではなくて、金子ふみ子であるということが分つてくれば、「無政府主義」の「革命」もより深く掘り下げることができるのではないか。

西欧人にしても、磯部や大東塾と通じるのはネチャーエフではなくて、キルケゴールだ。ただ、キルケゴールが神一個であったのに対して、彼らは神一社会(日本)であったが、どちらにしても、神と関わらせることによって、個あるいは社会が真理となると考えたことでは同じた(ネチャーエフもまた革命を神格化することによってその仲間に入るが、それだけ犯罪的だと云える)。ここで「原生」の諸君が原始宗教を指向することは一応おいておくが、ようするに問題はセンスだ。情念の方向だ。

名古屋市昭和区荒田町4の26 伊東章好気付

(西塔)

黒光1・2・3号 集団不定形9号

両方とも京都アナキズム研究会発行。「9・16大杉栄追悼50周年集会を準備せよ」と「全てのアナキスト、ノンセクトは全関西ノンセクト連合救対へ結集せよ」という二つの呼びかけ、及び「パトカー襲撃デッチ上げ

事件」へのアピールがなされている。また「黒光」3号

では、第2次アナ連の解散を敵前逃亡と批難し、日本アナキスト連盟の再結集が提起されている。ただ、「黒光」創刊号のあとがき、あるいは「不定形」9号その他の情報からみて、関西地区はARF・京都アナ研・旧自連の三者鼎立(いわば、黒色三国誌関西版?)模様であり、いかに彼らがその相違を認め合って連合しうるか、その事がない限り、現実問題として、現段階におけるアナ連再建は遠い夢だと思ふ。

(西塔)

イオム 2号

塩さんの「加藤一夫論」が載っている。冒頭に「わが国でクロボトキンの農工結合の分散制度を評論した人は幾人かはいるが、この示唆を通して農本主義としてまとめた人は加藤一夫だけである。」と書かれているが、この一文に、加藤一夫論の問題点が総て集約されているだろう。塩さんも言われるように、現在は再び工業主義が問題とされてきており、学者や評論家の中からでさえ、これからは資本主義と社会主義の対立ではなく、科学主義と反科学主義が対立しなければならないと言いつつ出すものまで出てきている。このような時代の流れの中で、日本でも、純正無政府主義や農本主義といったものが新し

い角度から見直される必要があると言えらる。この点で加藤一夫も再評価されていいと思うのだが、しかし、大杉に次ぐアナキストとみなされていたという加藤一夫が、何故、その考えをアナキズムではなく農本主義として主張したか、その点は批判的に考察する必要があるのではないか。

(西塔)